

西明寺蔵『龐居士語録』の詩偈について

大 橋 崇 弘

はじめに

禅僧とは異なる側面から唐代中国仏教に多大な影響力を有していた存在に居士がある。多くは官人として半僧・半俗の生活を送り、それらの中には詩作に注力する者も多数あった点も当時の居士仏教にみられる一つの特徴である。一連の居士達の中で、とりわけ著名なのは龐居士として知られる龐蘊（？～八〇八）である。馬祖門下で開悟し、語録や多くの詩作を残したことは『祖堂集』や『宗鏡録』にその詩偈が引用されている点からも周知の通りである。龐蘊の著作の内代表的なものに『龐居士語録』があり、当時の居士の思想と状況を伝える資料である。だが、本書の原本及び宋代の写本は散逸し現在に残っていない。本稿は近年になり発見された西明寺蔵『龐居士語録』の特に詩偈を紹介し、失われた宋版の古態を留めている写本であるかという可能性の考察を目的とする。

一 『龐居士語録』写本をめぐる先行研究

さて、散逸した『龐居士語録』であるが、その写本については現在、明代の崇禎十年（一六三七）刊行本が最古の伝本とされる。明版より以前に元本が存在していたことは「重梓」・「重刻」の語が諸写本の序文や巻末に用いられていることから確實と考えられている。しかし、現在、明版の原形であったであろう宋版の発見には至っていない。以下に現存する主要な『龐居士語録』写本を刊行年代順に挙げる。刊本としては前述した崇禎十年刊行の明版、承応二年（一六五二）刊行の和刻本⁽¹⁾、咸豐元年（一八五二）刊の清版となる。これらの写本に対し、本稿にて検討する西明寺本『龐居士語録』は文明十八年（一四八六）に書写されており、明版から一世紀半ほど刊行時期を遡ることが可能である。西明寺本に関しては、石川力山氏の研究により写本としての資料価値が限定的ではあるが認められている。明版の本文がどれほど本来の

姿を失っているかを明示するため、宋版系と氏が考える清末咸豊本との比較によって不完全な点を注記しつつ対校を行った。その結果、清版で増補された部分を除外した箇所が、西明寺本と合致することが判明した。西明寺本の原本が宋版であったかについての疑問は残るものの、明版以前の姿を伝えることは確実であるとする。一方、清版と明版では全体にわたって異同が多く、特に龐居士と所縁の石頭や馬祖門下の禅僧達との話を比較すると相違点が見られる。このように『龐居士語録』は崇禎十年刊行の明版系と咸豊元年刊の古形を残す宋版系という二系統に体系化された。

先学においては主に語録部分の対照に着目し、綿密な研究を行っているが、結論として西明寺本が宋版と明版の時間的空白を埋める資料である確証は得られていない。本稿では『龐居士語録』三巻のなかで未だ検証がなされていない詩偈二巻を重点的に整理する。主として明版との比較を試みるものである。

二 西明寺版『龐居士語録』について

愛知県豊川市の曹洞宗寺院・西明寺に収蔵されている『龐居士語録』は文明十八年（一四六八）に書写されたものであり、明版以前の姿を残す可能性を持つ資料である。その根拠として奥書の記述を挙げることができる。

西明寺蔵『龐居士語録』の詩偈について（大橋）

文明十八丙午年六月十四日於橋山大洞禅院北□下書 苾芻崇順僧
これから逆翁崇順が現・静岡県周智郡森町の大洞院輪住の際に書写されたと考えられる。西明寺は駿河大洞院の門葉、太源宗真派下真巖派の寺院であり、三河乾坤院の太素省淳（？～一四九八）によって再興された。逆翁は西明寺の本寺である尾張乾坤院二世にも就いた曹洞宗の僧である。大洞院と乾坤院は本末関係にあり、大洞院で書写された『龐居士語録』が孫末寺院にあたる三河西明寺に収蔵された点に疑念を挟む余地はない。十五世紀の東海地方に於ける曹洞宗発展の拠点は遠江であり、その後尾張から三河へと教線を拡大した。⁽⁴⁾ こうした背景の中で西明寺蔵『龐居士語録』が東海地方曹洞禅の活発な布教活動の中で師資によって受け継がれてきたことは想像に難くない。また、明版よりも古態を残すもう一つの根拠は、逆翁が依拠した元本に関する跋文の記述である。

嘉定十有四辛巳年中春 前潭州寧郷県白楊山証聖禅寺 住持嗣祖 苾芻紹祈謹跋

これによると崇順が依用したのは、嘉定十四年（一二二二）に湖南省寧郷県の白楊山証聖禅寺において前住持の紹祈という人物が書写したものであることが窺える。また、西明寺本の特徴として他の写本との構成上の相違があり、その一つが跋文である。これは明版には付せられておらず、嘉定十四年（一二二二）という記述から宋版刊行の際に付せられたと思わ

西明寺藏『龐居士語録』の詩偈について（大橋）

二五二

れる。以上の点から、西明寺本は古形を保つと見ることができ
る。

一方、問題点としては、現行本は語録一卷・詩偈二巻とい
う三巻本の体裁であるのに対し、古い時期の書目録⁽⁵⁾では語録
一卷、詩偈三巻、龐居士歌一卷の構成をとる。西明寺本は前
者の体裁であり、構成の相違の要因に結論は下されていない
ことが挙げられる。書籍が刊行される際に編集者や上梓者の
手が加わることは通例としてみられるものであり、また宋版
が善本であるとは限らないことも視野に入れて研究が試みら
れてきた。

先学においては、主として語録部分の対照に着目し綿密な
研究を行っている。しかし、結論として西明寺本が宋版と明
版の時間的空白を埋める資料である確証は得られていない。
本稿では『龐居士語録』三巻のなかで未だ検証がなされてい
ない詩偈二巻を重点的に整理するものである。これまで詩偈
部分は各写本間での写誤等の異同が少ないため注目されるこ
とはなかった。本稿で筆者は詩偈の構成の相違を検討する。
主として明版と西明寺本の比較を試みる。

三 『龐居士語録』構成の変化と思想的特徴

『龐居士語録』の詩偈（正式には西明寺本では『龐居士詩』上・
下巻の二巻本である。以下西明寺本は『龐居士詩』と略す）の特

徴の一つは、語録と詩偈の部分が個別のものとして分割され
ていることである。明版系の写本も宋版系の清代本も共に語
録を巻上、詩偈を巻中・巻下とする三巻本となっている。前
述したように龐居士の著作は語録一卷、詩偈三巻、歌一卷と
伝えられているため、最初に刊行される際に編集が加えられ
たと考えられる。『景德伝燈録』と『祖堂集』によると龐居
士の詩偈は三百篇であったとされるが、現在の写本はおおよそ
二百篇であり三巻本の二巻分にあたる。このことから西明寺
本の元本が書写された時期である十三世紀には語録と詩偈を
統合した現行本の姿に編集されていたと想像できる。

次に、『龐居士詩』と明版『龐居士語録』巻中・巻下を比
較してみると、誤写などの記述上の特徴の相違は微々少であ
り、同じ底本に基づく写本であることが考えられる。しか
し、全体の構成に関しては大きな相違が見られた。

【西明寺版】

『龐居士語録』

序文＋本文

『龐居士詩』巻上

八十二詩＋三十七詩

『龐居士詩』巻下

八十一詩

【明版】

『龐居士語録』巻上

本文

『龐居士語録』巻中

八十二詩

『龐居士語録』巻下

八十一詩＋三十七詩

以上のように『龐居士詩』巻上の後半に含まれる三十七篇の詩偈が明版『龐居士語録』では巻下に編入されている。このような構成上の違いが生まれた要因としては、明版編集の際に語録の冒頭から序文が削除され、また巻末に禅僧の拈提が加えられたため、各巻の容量を調整するため改変されたと考えられる⁽⁶⁾。しかし、前述したように明版以前の『龐居士語録』では語録と詩偈を分割する傾向があり、語録が増補されたとしても元来、個別のものであった詩偈を編集する根拠になるとは考えにくい。

一方、明版編集の際に巻中から巻下に移行された三十七篇の詩偈を検討すると、共通点としては浄土思想に関する語句を含むものが多い。明版・巻中に二篇ほど浄土関連の詩偈をみることが出来るものの、編集後の巻下に浄土についての境界を述べた詩偈が集中していることが判明した。元来、浄土関連の詩が多かった巻下に巻上から同種の詩を加えて纏めたと考えられる。用例の一部を見てみると、

世間最上事、唯有修道強。若悟無生理、三界自消亡。蘊空妙德現、無念是清涼。此即弥陀土、何処覓西方⁽⁷⁾。
 四性同一舍、三身同一室。一切惡知識、總見弥陀仏⁽⁸⁾。
 無求乃法眼、有念却成魔。無求復無念、即是阿弥陀。真如共菩薩、総祇較無多⁽⁹⁾。

といった「阿弥陀仏」に関するものや、

西明寺藏『龐居士語録』の詩偈について（大橋）

但看起滅處、此箇是真如。教君殺賊法、不用苦多方。慧劍当心刺、心亡法亦亡。心亡極樂国、法亡即西方⁽¹⁰⁾。
 迷時三界有、悟即出羂纏。心無六入跡、清淨達本源。地獄成淨土、招手別諸天⁽¹¹⁾。

一念心清淨、処處蓮花開。一華一淨土、一土一如來⁽¹²⁾。
 難復難、持心離欲貪涅槃。一向他方求淨土、若論實行不相関。枉用工夫來去苦、畢竟到頭空色還⁽¹³⁾。

といった、「西方」、「浄土」に関する詩である。各々の内容を吟味する紙幅はないため、ごく要点のみを述べるならば、一心に西方浄土を求めることにより清浄心を発現すれば、三界ともに仏国土となるといった内容である。これは語録にみられる龐居士の言動と性質を異にするものである。語録部分では馬祖下の禅僧を列挙し、龐居士が彼らと互角に渡り合うことで、在家者ながら禅機優れた人物であることを示唆する意図があった。さらに詩偈部分においては龐居士の空性理解が高く評価されてきた。しかしその一方、不立文字を標榜する禅仏教にあつて、言句を嫌わず敢えて詩偈という形で悟境を表した龐居士の浄土観を汲み取った明代の仏教徒が、新たな視点から民間布教を図っていると言えよう。

語録にみられる龐居士の言行とは異なり、詩偈上の龐居士は詩作を通じて民間へ仏教を広める印象を強く与えるものである。これは『祖堂集』における龐居士の像にも共通する要素であるが、修禅者としての側面と同様に布教者・龐居士を

求めた民衆の希望が『龐居士詩』で具現していると思われる。念仏禪者としての龐居士像を強調することによって浄土思想の評価を高めようとした明代の社会背景による影響も看過できない。

小結

以上、明版と西明寺藏『龐居士語録』の詩偈の比較、検討を行ったが詩偈そのものに明確な相違をみることはできなかった。但し、構成に着目すると編集が加わることによって明版は浄土思想を強調する傾向を窺わせた。これは裏を返すと西明寺藏『龐居士語録』には純粹に禪者としての龐居士を評価する当初の思想が保持されていると考えられる。今回は宋版の要素を受け継ぐとされる清版に触れることはできなかったが、清版と西明寺本の関連を挙げると、語録部分は誤字脱字が一致し共通点が多く、詩偈には文体や語法に異同が多い。このような一種のねじれの原因究明のためにも、明版とほぼ異同のない西明寺本詩偈と清版詩偈との比較を今後の研究の課題としたい。

- 1 承応二年の和刻本と全く同じ内容・構成を有する無刊記の和刻本が存在するが、承応二年本は後になって無刊記本に刊記を付したものと推察される。

- 2 石川力山「宋版『龐居士語録』について」（『禪文化研究所紀要』十五号、一九八八年）。『景德伝燈録』・『祖堂集』・『五燈会元』などの禅宗燈史、宋史及び地方史まで網羅し、龐居士の言行に関する総体的研究となっている。その他の研究としては佐藤悦成「西明寺藏『龐居士語録』研究序説」（『愛知学院大学人間文化研究所紀要』十八号、二〇〇三年）があり、こちらは西明寺版と明版（続蔵経収載）の語録部分の対校表を付し研究の端緒となっている。

- 3 石川氏によると和刻本は明版との異同少なく、明版系に属する。

- 4 広瀬良弘『禅宗地方展開史の研究』（吉川弘文館、一九八八年）。

- 5 唐代では『唐書』、『崇文総目録』など、元代の『文献通考』など。

- 6 石川、前掲論文（三六七頁）。

- 7 『龐居士語録』巻下、『続蔵』巻百二十・三十七丁右上。

- 8 同『続蔵』巻百二十・三十九丁右下。

- 9 同『続蔵』巻百二十・三十八丁右下、三十九丁左上。

- 10 同『続蔵』巻百二十・三十七丁左上、下。

- 11 同『続蔵』巻百二十・三十八丁右下。

- 12 同『続蔵』巻百二十・三十九丁右下。

- 13 同『続蔵』巻百二十・四十丁左下。

〈キーワード〉『龐居士語録』、『龐居士詩』、三河西明寺

（愛知学院大学非常勤講師）